あの時を連れて来て

北 郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時を連れて来て

【Nコード】

N2206N

【作者名】

北郷

【あらすじ】

恋の始まりから3年。

誰かあの頃を連れ戻して……。

「お・待・た・せ〜！」

真夏の暑さも和らいだ、少し過ぎしやすくなってきた初秋。いつもより、少し着飾って由佳里が現れた。

駅前の地下へ降りる階段。その上から4段目。

由佳里と順哉はいつもの場所で待ち合わせをしていた。

「おそい、ホントにお待たせ〜、だ」

順哉は左腕を持ち上げて腕時計に目を向けた。

彼は、多分今日も由佳里が遅れて来るだろうと思っていた。

自分もそれに合わせて遅れて来ようとも思ったのだが、万が一彼女が早く来てしまうと、待たせてしまう。そう思い、いつも通りに早めに待ち合わせ場所にやって来たのである。

「5分25秒の遅刻」

順哉は淡白にそう言った。

「細かいなあ。たった5分じゃない。さあ、行きましょう」

(せっかきいつもより、着飾って来たのに)

由佳里は綺麗だつて褒められなかったことはちよつと残念だったが、少しだけ遅刻したのも事実である。由佳里は自分から仲直りの笑顔を向けた。

これで大丈夫。由佳里はそう思った。しかし、今日の順哉はいつもよりも少し冷たかった。

「それが遅れて来た人の言葉かな〜」

ぼそつと呟いた。毎回遅刻して、いつも笑ってごまかすのが本当は気に入らなかつたのだ。それが、今日、偶々口から出てしまった。

それに由佳里が、ついうっかり反応してしまった。

「順哉は何時に来たのよ。そんなに待った訳じゃないでしょ」

「ちゃんと、5分前には来てたよ。時間前に来るのが礼儀だからね」と言った。言ってしまった後で、順哉は失敗したと思った。

（3か月も待って待ちくたびれた）とジョークでも言っただけで笑い飛ばすべきだった。そう思った。

「へーそんな、きたな〜い格好で来るのも礼儀なんだ」

順哉の服装は、ボタンの取れた皺だらけのシャツに、少し裾の綻びたチノパン姿で、由佳里と並んで歩くには少し不釣り合いである。

「自分が気にしてるほど周りの人間なんて、見ちゃいないさ。それより、遅れてごめんなさいだろう」

「・・・」

- 二人の間には、付き合い初めて3年が経過していた -

由佳里は思う。

付き合い初めの頃の順哉は優しかった。

遅れて来ても、「無事に会えて良かった」なんて安心してくれたのに。

会えることを凄く喜んでくれたのに。

格好だっちゃん、私の目を気にしてくれていた。もう、私の目なんてどうでもいいの？

それでも・・・

「分ったわよ、ゴメン。これでいい。綺麗にするのって時間かかるんだから・・・」

謝った。語尾の声小さくなっていく。

「少し早く始めればいいことなのに・・・」

順哉は、つい本音を小声で口走ってしまった。

「だって、そんなに掛かると思わなかったんだも」

” 由佳里は自分から謝ったのに ” そう思うと、声が荒立ってしまった。

順哉も荒立った言葉に感情が抑えきれなくなってしまった。

「毎回、予想時間をオーバーするんだ。時間の感覚がマヒしてるんじゃないのか」

彼女はいつの頃からか毎回遅れてくる様になった。2度や3度、数回遅れた位で言ってるわけではなかった。

「ひどい、あなたの為に・・・」

（せっかく、あなたの為に綺麗にして来たのに。この洋服だって高かったけど、してもらいたくて・・・） そう思った由佳里もつい本音が出てしまった。

「そんな、汚い洋服じゃ、恥ずかしくて一緒に歩けないわよ」

順哉は少し俯き、黙った。

その無言の時間は、二人の心を追い詰めていった。

そして、順哉は由佳里に顔を向けきっぱりと言った。

「わかった、今日は止めて帰ろう！」

「えっ、ちょっと待ってよ……」

由佳里には、全く予想をしていなかった言葉であった……。いや、本当はそんな気がしていた。ただ、そうは思いたくなかった。

「一緒に歩けないんじゃないか」

そう言っつて、順哉は踵を返し歩き出した。

「わかったわよ……もう……」

由佳里も別の方向に進んだ。進むしか無かった。

二人は別々の道を歩き出した。

二人は自然に動かない体を、無理に一步一步意識して動かしている様な、そんな気がしていた。

こんなことは初めてだった。いつもは喧嘩しながらも、自然と元に戻るのであった。

（どうしてだろう。何時からこんななっちゃったんだろう。こんなんじゃない無かったのに……。）

由佳里は順哉と出会った頃を振り返る。

（あの頃は楽しかったな）。1日会えないだけでも凄く時間が長かったっけ。待ち合わせ時間が近づいてくるだけでドキドキしたよな）

思い出すだけでもドキドキしてしまう。

それに、

（いつも熱い目で見てくれたっけ。もう一度あの瞳に会いたい……）

由佳里が最近、デートの度に昔みたいにお洒落をしているのは、その為であった。

気がつけば由佳里は、待ち合わせ場所から少し離れたオフィス街のカフェの前に居た。初めて順哉と出会った思い出の場所に来ていたのである。

「ここから出て来た時に、道を聞かれたのが初めてだった。懐かしい……」

昔の初々しい順哉の姿を思い浮かべると、クスツと笑ってしまった。

そこに、

「すみません。”椿町駅”はどこらでしょうか」

由佳里に声が掛けられた。この声は……？

(へっ、順哉？ 追い掛けて来てくれたんだ)

怒ろつか、拗ねようか、それとも笑って見せようか。そんな入り乱れた気持ちを整理する間も待てなくて、由佳里は直ぐに振り向いた。

ただ、単に嬉しかった。

しかし、そこには、

「えっ？」

声はそっくりだが、小ざつぱりとした洋服に爽やかな笑顔。とても今の渋面な順哉とは大違いの雰囲気を持った青年が立っていた。でも？どこかで見たことがある。そんな気がして、呆然と見つめてしまった。

「あの〜どうかしましたか？」

「いえ・・・」

しかし、どう見ても初めて見る人である。

由佳里は、彼の雰囲気少し魅かれているのを感じた。

彼は就職試験で、田舎から出て来たとのことであった。試験が終わり、帰りの飛行機まで時間があつたのでちょっと観光でも思ったとのことである。

3年前、順哉と初めて会つた時と全く同じ状況であつた。

「良かったら、もっと良い場所があります。ご案内しましょうか？」

由佳里は、つい口走つてしまった。

ムシャクシャした気持ちを忘れない。そんな気持ちだった。

「本当ですか」

彼は思いがけない言葉に嬉しそうに由佳里を見つめて来た。

その透きとおつた熱い目に、何故か由佳里は懐かしさを覚えた。

『わかつた、今日は止めて帰ろう！』

言つてから失敗したと思つた。他に言葉は無かつたんだろうか。

順哉そればかりを頭の中で繰り返していた。でも、

(しょうがないよな、一緒に歩けないまでいわれちゃな・・・)

順哉は、自分に言い訳をするしかなかった。

(俺は、由佳里を待たせない様に、15分は前に来ていたんじゃないか。3年前はこんなんじゃないよな。時間前でも、自分が後になつただけで本当にすまなそうに謝つてくれたのに。今じゃ、遅れて当たり前か・・・)

そんなことを考えながら、順哉もまた死でもなく歩いていった。

(せっかく食事の予約までしたのに)

順哉は昨日が給料日であった。由佳里を喜ばそうと思って、食事の予約までしていた。

(でも、確かにこのかつこじゃ、お洒落な店に入るのは恥ずかしいかもな)

順哉の視界にはいつの間にか、懐かしい映画館が映っていた。

(懐かしいな。そう言えば、初めてのデートはここで映画を観たっけ。あの頃は他に誘う場所も知らなかったしなあ)

3年前、就職が決まった順哉は田舎から出てきた。誰も知り合いない彼は、社会人初めての休日に思い切って、就職試験で来た時に一度会ったきりの由佳里に連絡を取ってみた。

そして、彼女を初めて誘ったのがこの映画館なのである。

そんなことを考えている時であった。

「すみません。これ、落としませんでしたか」

彼に女性の声が向けられた。

「あれ、まさか由佳里？」

でも、声は似ているが、少し声が高い気がする。

振り向くとそこに居たのは、素朴な若い女性であった。由佳里より少し若い女性に、何処となく由佳里の雰囲気を感じた。が、(こんなに初々しくないか)

そ思った。

彼女は映画券を手にしていた。

「違いますけど」

そう応えた順哉に、女性ははにかんだ様に下を向いた。

「すみません。嘘なんです。良かったら一緒に見てもらえないかと思つて」

顔が真っ赤である。

彼女の話ではタダ券を2枚もらったのだが、一緒に行く人がいないので、仕方なく一人で来てしまったとのことである。

映画館の入口の前で、入ろうかどうしようかと迷っていたら、順哉を見て思わず声を掛けてしまったとのことだった。

「ホントです。見ず知らずの男の人に声を掛けたのは初めてなんです」

「ハハハ、いいですよ。僕で良かったら」

この後、並んで映画を観て、カフェでお茶をした。何気ない映画の話でさえも話は盛り上がった。

彼女は声を掛けてしまったことを、まだ気にしていたみたいで、

「どうして声を掛けてしまったのか、自分でも・・・」
そう言つて来た。

そんな彼女の言動は、順哉の心を攪つた。

「声を掛けられて光栄でした。」
そう応えた。

それに順哉の顔を見つめた彼女は、
「目が綺麗ですね」
そう言った。

順哉は以前にも誰かにそう言われた様な気がした。

順哉は彼女とは一緒にいるだけで楽しかった。

記憶の何処かの懐かしい楽しさを思い出させるのである。

(昔に戻ったみたいだな。昔?いつのことだろう)

カフェを出ると、自然と脚は山上公園に向いていた。

公園までの距離は近い。直ぐに見えて来た。

(そう言えば、あの時もここに来たんだっけ)

順哉は不意に由佳里とのことを思い出した。

(あの頃は会えただけで良かった。次に会えるまでが長かったよな。存在が当たり前になってしまったのかもかもしれない)

順哉はしみじみとそう思った。

その時、順哉は気付いた。

(そうか、この子、あの頃の由佳里の雰囲気こそっくりなんだ)

・・・3年前の恋の初めの日

3年前、由佳里は短い時間だったけど、就職試験で田舎から出て来た順哉を案内をした。ただ、肩を並べての他愛もない話しだった。しかし、見慣れたはずの景色が初め見るかのように新鮮で輝いていた。

港を観ながらカフェでお茶をした。

あの時の順哉は透きとおる熱い目をしていた。

見つめているだけでときめいた。

そして、2度目の出会い。

登録しただけの電話番号から、突然の電話。

会えたことだけで胸がいっぱいだった。

映画を見て、お茶をして。中華街で食事をした。何を話したか全然覚えていないけど話がはずんだ。

そして、夕暮れの公園で沢山の人を集めている大道芸を見た。

今でも昨日の様に覚えている・・・。

観光案内の最終点に、自然と脚は山上公園に向いていた。

すっかり、由佳里は懐かしい気持ちに浸っていた。いつしか、3年前の様な新鮮な気持ちになっていた。

(どうして??・・・そうだ)

この服装に雰囲気。彼はあの時の順哉にそっくりなのである。

山上公園では大道芸人が沢山の人を集めていた。人垣は何重もの大きな輪になっていた。

その少し手前で彼がそれに興味を持った。

「少し見て行きませんか？」

「ええ、そうですね」

彼の笑顔に、あの時の順哉が重なってしまう。あんなにも愛していた彼の笑顔に。

(今だって?)

暫し、二人は大道芸を眺めていた。

時計を見た彼が急に、

「もし仮にですけど、僕と由佳里さんがお付き合いしたとします。そしたら、こんな時間ってどの位続くんでしょう?」

「えっ、どの位って?」

「すみません。きっと、由佳里さんだったら、ずっと同じ気持ちでいてくれますよね」

彼はそう言って頭を下げた。

「もう時間です。帰らなきゃ。今日、見た由佳里さんは最高に素敵です。今、頭の中にいる人と幸せになって欲しいと思います」

「頭の中って?」

「駄目ですよ、途中からずっと他のこと考えていたでしょ」

「そんなことは・・・」

「あたりでしょ?」

彼は人懐っこい顔でそう言った。

由佳里は言葉を返せなかった。

「それじゃ、ありがとうございました。凄く楽しかったです。3年後も最高のまま居て下さいね!」

彼は小走りで一人、帰って行った。何回か振り向き、大きく手を振りながら・・・。

由佳里も手を振って応えたが、彼の残して言った言葉に気を取られていた。

残された由佳里は、その場で立ち尽くしたまま、ボツとして大道

芸を眺めていた。

「急に無口になっちゃって変ですね」

順哉が公園の中で隣を歩いていたら彼女を見ると、順哉の顔を見上げていた。

「いつから見えていたか分かりますか」

「えっ？」

「ずっと前からです」

「ホントですか？すみません」

「ウソ？」

「ウソですよ。ウソと言うことに気付かなかったでしょ。それは、私のことをずっと見てないからですよ」

そう言って、彼女はどんどんと人垣のある方へ歩いて行った。

「ねえ、何かやってますよ」

そこでは、大道芸をやっていた。幾重の人の輪が出来る位の盛況ぶりであった。

「見て行きましょうよ。ね」

「えっ、ええ」

二人は人垣の中で大道芸を眺めた。

彼女は小さな子どもの様に、キャツキャ言いながら手を合わせて喜んで見ていた。

しかし、順哉は茫然と眺めている一人の女性を見つけてしまい、そこから目が離れなくなってしまうていた。

「あれは、まさか……」

「戻ったらどうですか」

さっきまで喜んで大道芸を見ていた彼女が不意にそう言った。

「えっ、何がですか？」

「分るんですよ。魔法のメガネを通せばね」

彼女は、両手を軽く握り目に当てた。

「楽しかったです。今日の順哉さんは素敵でしたよ。ちょっと前まではですけど……。その気持でいてくださいね。凄い良い目してましたよ。その服装はちょっと？ですけど。フッフ」

「良い目？」

「そう、熱い澄んだ目をしてましたよ」

彼女は目を大きく開けて、笑って去って行ってしまった。

「ちょっと、待って……」

そう声を掛けたが、彼女は振り向いて手を振ると、また走り出した。

（本当に魔女だったんじゃないだろうか）

そんな気がして来た。

暫く彼女を眼で追っていたが、見えなくなると、順哉はその場を移動した。

丁度、パフォーマンスが終わり人が散って行く中、順哉は由佳里の後ろに辿りついた。

「じめん」

その言葉に、由佳里の背中がピクリと動いた。

(えっ、順哉?)

怒ろうか、拗ねようか、それとも笑って見せようか。そんな気持ちが入り乱れた気持ちを整理するまでは待てなかった。

直ぐに振り向いた由佳里の目には……。

そこには、彼女を見つめる熱い澄んだ目があった。

今度は本当に順哉であった。

涙が自然と溢れて来た。言葉が詰まって直ぐに口に出て来ない。

順哉の言葉に、俯いて首を振るだけだった。

肩に乗せて来た順哉の手に頬を当てると、何かどうでもいいような小さなことに思えてきた。多分、順哉もそう思ってくれてるの違いない。由佳里はそう確信した。

そこに、

「3年ぶりですね、ようこそ。また一緒にお越しくださってありがとうございますとございます」

大道芸人のお兄さんが、大げさに頭を下げた。

「えっ?まさか覚えて……」

「はい、ここに来たみなさんを覚えています。そして、みなさんの幸せを祈っています」

「うそ……」

良く覚えてはいないのに、その不思議な大道芸人の姿は、3年前と全く変わっていない様に思えた。

「アンコールにお応え致しまして・・・」

勝手に始めたその芸は、3年前二人が付き合い始めたあの日、最後に見たものと同じだった。

二人だけのショーの間、彼女が彼の前に体を移すと、彼は後からそっと彼女の体を包み込むように腕をまわした。

あの時と同じ様に・・・。

「あの時に戻ろう」

「うん」

二人だけの路上ステージを暫し楽しんだ。

でも、次の日、早速二人は喧嘩をしてしまった。

ただ、今回は30秒足らずで終わったが・・・。

<おわり>

(後書き)

恋愛感覚を忘れて久しいので、ちょっとずれている部分はご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2206n/>

あの時を連れて来て

2011年11月16日06時36分発行